

研究紀要

第30号

—設立35周年記念—

「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動
—関東・中部地方の事例研究—

尾田 譲好

殻長・殻高組成からみた関山・黒浜式期の貝塚

古谷 渉

大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係

中川 莉沙

縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について

松浦 誠

ヒスイ輝石岩製の磨製石斧

上野真由美

柴田 徹

西井 幸雄

麻生 敏隆

坂下 貴則

小茂田 幸

大屋 道則

埼玉県内の緑色凝灰岩と菅玉

山田 琴子

上野真由美

赤熊 浩一

小林まさ代

大屋 道則

関東地方における周溝持建物の系譜

福田 聖

埼玉県における横穴式石室の分類と編年
—無袖石室と片袖石室を対象に—

青木 弘

北武藏児玉地域における内斜口縁环の編年的位置づけ

山本 良太

盾持有人埴輪頭部の分類と変遷について

長谷川啓子

鉄鎌からみた「征矢」と「野矢」についての予察
—埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に—

渡邊理伊知

古代寺院における食堂院の構造
—平城京遷都後の官寺を中心に—

香川 将慶

2016

公益財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

目 次

序

- 「ナイフ形石器文化終末期」集団の地域的行動 尾田 譲好 (1)
—関東・中部地方の事例研究—
- 殻長・殻高組成からみた関山・黒浜式期の貝塚 古谷 渉 (19)
- 大宮台地における諸磯式土器と浮島式土器の影響関係 中川 莉沙 (37)
- 縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について 松浦 誠 (57)
- ヒスイ輝石岩製の磨製石斧 上野真由美
柴田 徹
西井 幸雄
麻生 敏隆
坂下 貴則
小茂田 幹
大屋 道則 (69)
- 埼玉県内の緑色凝灰岩と管玉 山田 琴子
上野真由美
赤熊 浩一
小林まさ代
大屋 道則 (79)
- 関東地方における周溝持建物の系譜 福田 聖 (87)
- 埼玉県における横穴式石室の分類と編年 青木 弘 (107)
—無袖石室と片袖石室を対象に—
- 北武藏児玉地域における内斜口縁環の編年的位置づけ 山本 良太 (135)
- 盾持人埴輪頭部の分類と変遷について 長谷川啓子 (149)
- 鉄鎌からみた「征矢」と「野矢」についての予察 渡邊理伊知 (163)
—埼玉県内における古代遺跡からの出土事例を中心に—
- 古代寺院における食堂院の構造 香川 将慶 (181)
—平城京遷都後の官寺を中心に—

縄文時代中期の環状集落と小規模集落の関係性について

松浦 誠

要旨 住居跡の分布がドーナツ状を呈する環状集落は、縄文時代中期に盛行する。この集落への評価は、大規模で周辺の拠点的な役割を果たしていたとするものと、小規模な集落が累積した結果で一時期の規模に大差はないとするものに2分される。しかし、大規模な環状集落と小規模集落を比較する試みは少ない。

本稿では、両者の限られた時期における規模や形状の比較を試みた。結果、小規模集落も環状化するが、拠点集落とされているものは、集落の円の大きさや住居跡数が異なることを明らかにした。そして円の大きさと集落の継続期間から環状集落を5つに分類し、円の位置や大きさが時期によって異なる集落は、時期が連続しているように見えても継続性は低く、反対に、同心円状に維持されているものは継続性が高いことを論じた。

はじめに

縄文時代中期に住居跡群がドーナツ状を呈する環状集落が盛行する。この環状集落は、住居跡数の多さや環状という規則的な形態から、これまで多くの研究が行われてきた。特に現在では、環状集落を拠点的な集落として評価するものと、小規模集落の長期的な累積の結果であるとするものに2分される。両者の評価の違いは、環状集落のなにを重視するかの違いによるものである。環状集落を高く評価する研究では、長期にわたって集落が継続され、かつ環状という形態が維持される点に着目し、集落の継続性が高いことに注目する。そして、そうした高い継続性や規模の大きさ、墓壙などの施設を有することから、周辺の小規模な集落とは異なり、拠点的な集落であったと評価する（小林達 1986、谷口 2004、鈴木 2006）。

一方、環状集落をこれまでよりも低く評価する研究では、集落の一瞬の姿を重視する。横切りの集落論と呼ばれるこの研究では、従来の土器形式では集落の一瞬の姿はとらえられないと論じている。そして、より細かい型式の設定や土器の接合関係などから集落の一時期をとらえた結果、環状

集落も小規模集落と規模の上では変わらず、大規模な環状集落も小規模な集落が長期的に累積した結果であると評価しているのである（土井 1988a、黒尾 1988、小林謙 1995）。

両者は、そうした着眼点の違いをもって様々な研究を進め、論戦を繰り広げる。しかし、この論点の中心である環状集落と小規模集落を比較し検討しようとする研究は実は少ない。筆者は以前、荒川流域における大規模集落と小規模集落を比較し、小規模集落も環状化していることについて論じたことがある（松浦 2013）。

環状集落と小規模集落の関係性を評価するためには、両者の何が違い、何が同じなのかを把握する必要がある。そのためには環状集落と小規模集落の比較を行うことが不可欠であり、本稿においても、同様の観点から両者の比較を行いたい。また、そうした比較から得られた結果をもとに、環状集落と小規模集落の分類についても論じていきたい。

今回の検討では、集落の形状が分かることを必要としたが、小規模集落はその形状が分かるものは少ないため、これまで集積した埼玉・東京・神

奈川の3都県の遺跡を対象とした。

1. 環状集落と小規模集落の比較について

はじめに環状集落と小規模集落について比較していく。環状集落は多数の住居跡が環状を呈するように見えるのに対し、小規模集落は住居の数が少なく、確かに環状には見えない。しかし、小規模集落の長期的な累積の結果であると横切りの集落論では論じられている。この説が正しいのであれば、小規模集落も累積していくれば環状化していくということになる。研究者によっては、集落の環状化は、台地の縁辺に沿って住居がつくられることや、他の場所よりも藪地化の度合いが低いことによる再利用など、環状化が偶然によるものである可能性が示唆されている（中山 1995、黒尾 1988）。しかし、集落は必ずしも台地の縁辺に作られるわけではない。また、開けた土地を再利用しただけでは、同じような位置に環状が重なる傾向は説明できない。集落を営んだ人々は、何らかの意図をもって、長期間にわたって集落を環状化させたはずである。

小規模集落の環状化は、両者を比較することで明らかにできると考える。つまり、環状集落の一時期の住居配置と小規模集落の住居配置が同じような状態になれば、小規模集落は環状集落の一時期の姿であるということができる。両者の比較は、同時期の住居にマークをつけて凶化し、その配置について検討する方法をとった。時期の決定は炉体土器や埋甕などの住居に帰属する可能性の高いものから決定し、覆土の土器から決定した住居に関してはその可能性があるという判断にとどめた。また、土器形式は横切りの集落論と同じ条件下での検討を行うことを目的として、新地平編年を用いた。

埼玉県富士見市にある中沢遺跡は加曾利 E 1期から E 3期までの環状集落である。加曾利 E 2期（11a期）では4軒の住居が間をあけて並ぶ様子

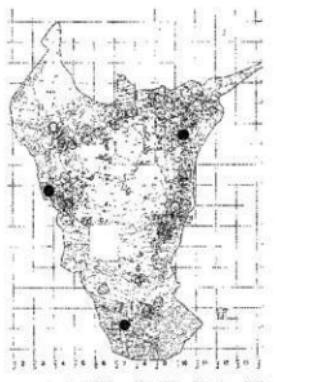
が見て取れる（第1図一1）。また、埼玉県飯能市の八王子遺跡は藤内 I期から加曾利 E 2期にわたって70軒の住居が作られた環状集落である。井戸尻 I期（9a期）には3軒、次の井戸尻 II期（9b期）には2軒の住居跡が構築されている。井戸尻 I期（9a期）の3軒は、最終的に広場空間になる中央部を三角形状に囲んで配置している。このような、広場空間を挟む、あるいは囲む住居配置は、東京都町田市忠生遺跡A地区や神奈川県横浜市二ノ丸遺跡でも同様にみられる。こうした状況から、環状集落は一時期においても環状化傾向にあることが分かる。

では、小規模集落はどうか。神奈川県横浜市の山田大塚遺跡は、井戸尻 II期から加曾利 E 1期にかけて2軒の住居跡をもつ小規模集落である（第2図一1）。重複する住居を含め、舌状台地の一角において井戸尻 II期（9b期）、井戸尻 III期（9c期）、加曾利 E 1期（10a期）にそれぞれ2軒の住居が営まれ、最終的には5軒の住居が円形を呈して配置されているよう見える。同市にある上台の山遺跡は、重複を含め井戸尻 II期（9b期）に3軒、井戸尻 III期（9c期）に3軒の住居跡を持つ集落であるが、これらの住居は台地の縁辺に三角形状を呈して並んでいる（第2図一2）。そのほか、東京都町田市三矢田遺跡の加曾利 E 1（10b期）の3軒（第2図一3）や、東京都八王子市郷田原遺跡の藤内 I期（7b期）の3軒においても（第2-4）数軒の住居が三角ないし円形に並ぶ様子をうかがうことができる。

以上のように環状集落は一時期においても広場空間を持って環状化するが、小規模集落も環状集落の一時期と同じように、円形を配するような住居配置をとっている。つまり、小規模集落も環状集落のように長期間営まれば、環状化していく可能性があるといえる。



1 中沢遺跡、加曾利E2期（11a期）



2 八王子遺跡、井戸尻I期（9a期）

第1図 環状集落の住居配置

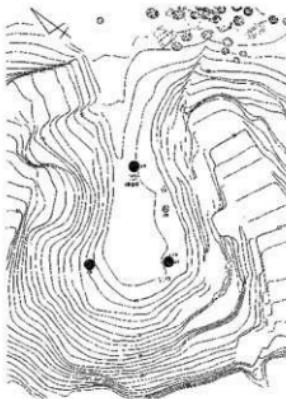
2. 環状集落と小規模集落の差異

前段では小規模集落も環状化する傾向が見て取られ、小規模集落が長期間にわたって継続されれば、環状集落へとなりうることを指摘した。では、果たしてすべての環状集落が、小規模集落の累積した結果なのであろうか。環状集落の中には、30軒程度のものもあれば、100軒を超えるような大規模な集落も多く存在している。こうした集落はその住居跡の数もさることながら、環状の円の大きさにも差があるよう見える。環状集落の規模の格差について谷口康弘による指摘がある。谷口は、環状集落には居住域や墓域の規模に格差があり、居住域の外形は約70～150mの規模の差があることを指摘している（谷口2005）。ここでは、環状集落とともに小規模集落にもこうした円の大きさの違いがあるのかを検討し、違いがあるとするならば、それらがなにに起因するのか考えていきたい。ここでいう円の大きさは、同時期の住居跡を覆われるように作った円の最大径を差す。

前述した八王子遺跡の井戸尻I期（9a期）では、集落の円の大きさは約135mとなっている（第3図-5）。忠生遺跡A地区は、100軒を超える大規模な環状集落である。調査範囲は集落の半分強であるため、最大径は不確かだが、藤内I期（7b期）に2軒、藤内II期（8a期）に7軒の住居を有し、円の大きさは約130mに達する。大規模な環状集落ではやはり、住居跡群の構築する円は非常に大きい。これに対し、小規模集落では、山田大塚遺跡が井戸尻II期（9b期）～加曾利E1期（10a期）にかけて5軒の住居跡は円の大きさが約78mである（第3図-2）。さらに三矢田遺跡の加曾利E1（10b期）の3軒では、円の大きさは約36mにみたない（第3図-1）。こうして比較すると、小規模集落の円の大きさは、大規模な環状集落に比べると小さいことが分かる。これまで見てきた小規模集落と大規模な環



1 山田大塚遺跡、井戸尻Ⅱ期～加曾利EⅠ期
(9b ~ 10a期)



2 上台の山遺跡、井戸尻Ⅱ期（9b期）



3 三矢田遺跡、加曾利EⅠ期（10a期）



4 那田野原遺跡、藤内Ⅰ期（7b期）

第2図 小規模集落の住居配置

状集落は、集落内の住居配置こそ似たような傾向を示すが、住居間の間隔、すなわち円の大きさには大きな差があることが分かる。こうした差異は、長期的に累積した場合より明確になり、規模が大きく異なる環状集落となる。つまり、山田大塚遺跡のような小規模集落がいくら累積しても、八王子遺跡のような環状集落にはならないということができる。

集落の円の大きさから、小規模集落が必ずしも大規模な環状集落にはならないことが明らかになった。ここで、小丸・小高見遺跡と多摩ニュータウンNo.446遺跡について触れていくたい。神奈川県横浜市に位置する小丸・小高見遺跡は、後期に集落の最盛期をむかえるが、阿玉台1b期と井戸尻期、加曾利E3期それぞれ断続期間を経て集落が営まれる。最終的な規模は、17軒と小規模であるが、井戸尻1期には8軒の住居が営まれている（第3図-4）。この時期の住居は台地の縁辺に並んで環状を呈しているが、その円の大きさは約150mに及んでいる。また、東京都八王子市の多摩ニュータウンNo.446遺跡は加曾利E2期に18軒の住居がつくられる集落である。加曾利E2期（11b期）に11軒の住居跡が約85mの円を構築している。こうした集落は、環状集落に比べ短期的に営まれた集落であるが、円の大きさは八王子遺跡や志生遺跡A地区などの大規模な環状集落に及ぶ規模である。一方で環状集落であっても円の大きさが小さいものもある。神奈川県横浜市の二ノ丸遺跡は加曾利E2期から加曾利E4期にかけて営まれた環状集落であり、最終的な住居の数は100軒を超える。しかし、加曾利E2期（11b期）の3軒の住居跡は、75mほどの円を構築しているに過ぎない（第3図-3）。

ここまでを整理したものが第3図である。集落が構築する円の大きさを3段階に分け、小規模集落と環状集落をそれぞれ並べた。こうしてみると、三矢田遺跡の規模が非常に小さいことが分か

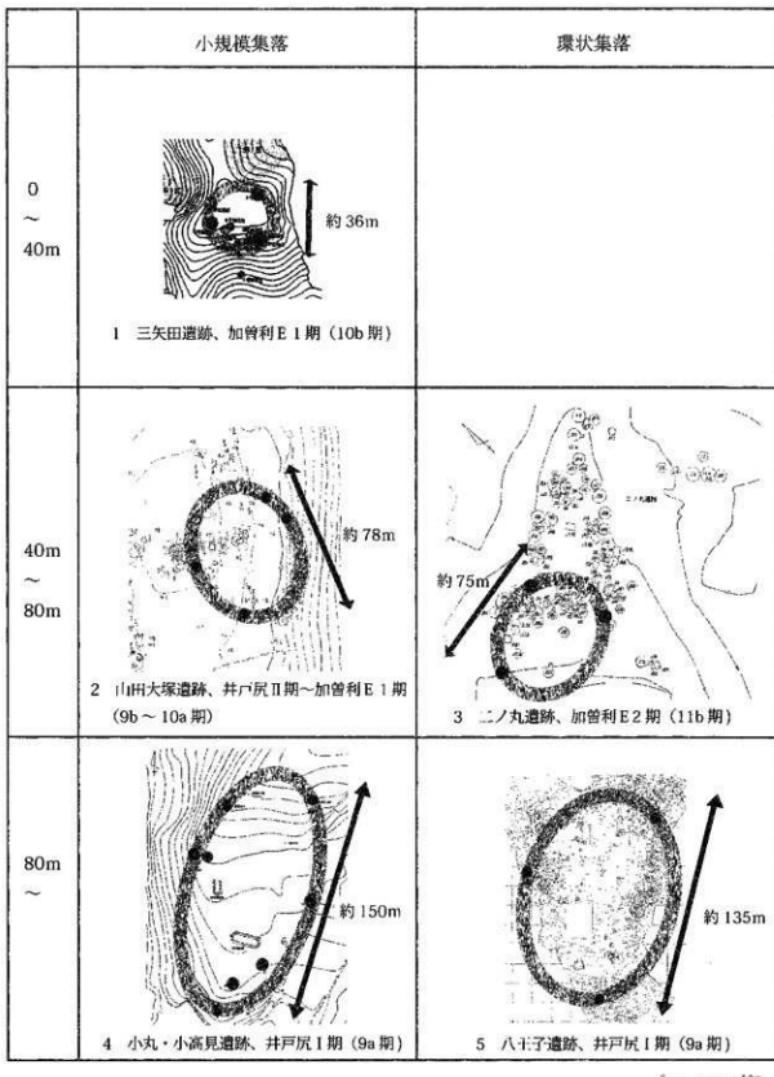
るが、山田大塚遺跡と二ノ丸遺跡の円の大きさは大差がないことが分かる。また、小丸・小高見遺跡と八王子遺跡についても同様のことが言える。これらのことから以下のことが示唆できる。環状集落と小規模集落はどちらにおいても、住居配置による円の大きさは、集落によって差がある。そして累積すれば、円の小さい小規模集落は、円の小さい環状集落になり、円の大きい小規模集落は、円の大きい環状集落になると考えられる。

では、こうした円の大きさの差は何に起因するものなのか。当然ながら舌状の台地に沿って集落をつければ、その台地の広さによって集落を構築できる広さ、すなわち円の大きさは制約を受ける。円の大きさはそうした土地の広さの違いに影響を受けていることは間違いないが、一方で、山田大塚遺跡では、土地の広さに余裕を持ちながら78mほどの集落が構築されているのみである。これは必ずしも土地の広さに合わせた規模の集落がつくられているわけではないことを意味する。また、そもそも狭い土地に集落を構築するということは、その広さでも足りる規模の集落であるともいえる。

つまり、環状集落における円の大きさの差は、集落を構成する人数、規模の差によるものであり、より多くの人数を抱えた、あるいは抱える可能性のある集落は大きな円をつくるのではないか。そう考えると、円の小さい小規模集落は、円の小さい環状集落を構築した集団が一時に利用した集落、あるいは円の大きい環状集落を構築した集団が離散して構築した集落などと考えられる。一方の円の大きい小規模集落は、大規模な環状集落が構築されるはずだったが、何らかの理由で短期の利用に終わってしまったと考えることができる。

3. 円の大きさと継続性による分類

以上のように小規模集落と環状集落には各々円の大きさに差があり、円の大きさが近いものであ



— 50m —

第3図 環状集落と小規模集落の円の大きさ

れば、小規模集落も環状集落になりうることを論じた。では環状集落と小規模集落の差はどこにあるのか。それは言うまでもなく累積期間である。

小規模集落である小丸・小高見遺跡では2時期、山田大塚遺跡では3時期であるのに対し、環状集落である二ノ丸遺跡は6時期、八王子遺跡は11時期に及ぶ。つまり小規模集落は、短期的な環状集落であるといえる。

これらのことと総合すると、中期の環状化する集落には、円の大きさという点での規模の差と、累積期間の差があり、その2点によって環状集落が分類できるのではないか。規模の大きさは前述の図をもとに、80m以下のものを小規模、80m以上のものを大規模とする。また、累積期間は小規模集落が2~3時期までのものが多いことを鑑みて3時期以下のものを短期、4時期以上のものを長期として分類を試みた。

以下が分類の例である(第4図)。

- ①大規模長期的(例八王子遺跡)
 - ②大規模短期的(例小丸・小高見遺跡)
 - ③大規模・小規模複合(例二の丸遺跡)
 - ④小規模長期的
 - ⑤小規模短期的(例山田大塚遺跡)
- ①は大規模な集落が長期にわたって営まれたものである。八王子遺跡や忠生遺跡A地区をはじめとした大規模な環状集落がこれに該当する。住居の配置が同心円状に作られ、中央広場には住居がつくられない。こうした集落は、前の時期の住居の位置を少なからず把握しているため、継続性は高いと考えられる。
- ②は大規模な集落だが、営まれる期間は短期のもので、小丸・小高見遺跡などがこれに該当する。この集落は、円の大きさの上では、①の集落に匹敵するが、短期間で営みを終えている。これは、そこがほかの大規模な環状集落から一時に移り住んだか、長期的に営むにはふさわしくない場所だったなどの理由が考えられる。

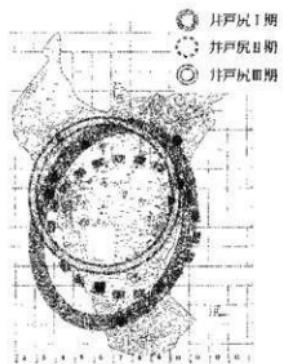
③は長期的な集落だが円の位置や大きさが一定ではない集落である。二ノ丸遺跡は、先に取り上げた加曾利E2期(11b期)においては円の大きさは75mほどだが、その後の加曾利E2期(11c期)においては3軒の住居が135mの間をもって構築され、円の位置も異なっている。つまり円の大きさや位置に前の段階のものが踏襲されていないのである。こうした集落では、時期が連続しているように見えても、その継続性は低い可能性が指摘される。

④は継続期間としては長期的だが一時期には小規模な集落である。今回の検討では類例を提示できないが、二ノ丸遺跡のように環状集落とされる集落においても、規模の小さい集落が営まれる時期があることから、そうした集落が長期にわたって営まれる可能性が考えられる。

⑤は短期的で小規模な集落である。これまで小規模集落と呼ばれてきた集落であり、山田大塚遺跡などがこれに該当する。こうした集落は、③や④の環状集落の一時期的な利用である可能性がある一方で、①の集落とは円の大きさにおいて明らかな差が見受けられる。

円の大きさと累積期間から、環状集落について以上のような分類を試みた。これまでの環状集落のイメージである大規模で長期的という面は、①大規模長期的な集落が当てはまる。この集落は断絶期間がないとは言えないが、ほかの集落に比べ継続性が高いと考えられる。こうした継続性の高さは墓の構築や交易などを可能にするものと言え、地域の拠点的な役割を担っているという可能性も考えられる。これに対し、③大規模・小規模複合集落は、時期の上では長期的だが、その継続性は低いとみられる。こうした集落を規模のみで拠点的とは言えないし、むしろ円の小さい時期が終焉した時には、周辺の小規模集落への移動を考える必要がある。また、⑤小規模短期的のこれまで小規模集落とされてきたものと、①の拠点的な

大規模・長期的集落

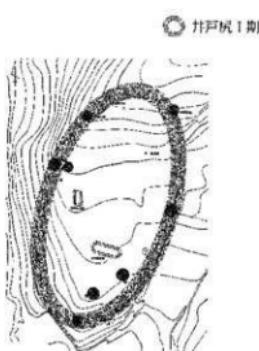


1 八王子遺跡

規模—90～135m

期間—11 時期（縄文 I ～加曾利 E 2 期）

大規模・短期的集落

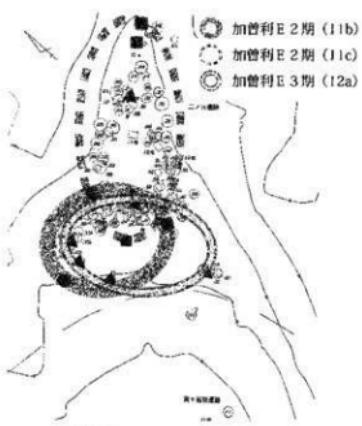


2 小丸・小高見遺跡

規模—150m

期間—2 時期（井戸尻 I ・ II 期）

大規模・小規模複合集落

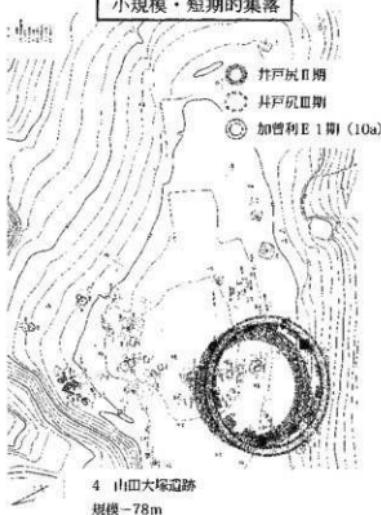


3 二ノ丸遺跡

規模—75～135m

期間—6 時期（加曾利 E 2 ～加曾利 E 4 期）

小規模・短期的集落



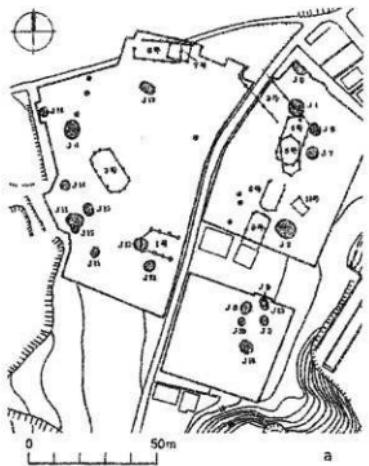
4 山田大塚遺跡

規模—78m

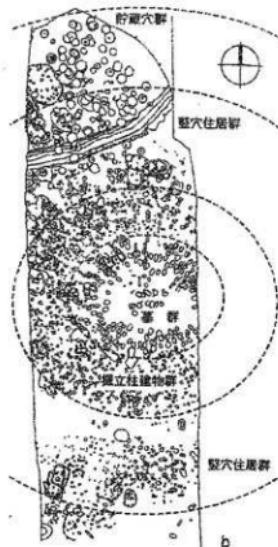
期間—3 時期（井戸尻 II ～加曾利 E 1 期）

— 30 —

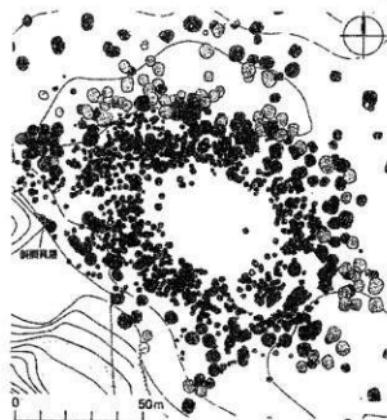
第4図 環状集落の分類



廣場空間に基群、外側に掘立柱建物跡・竪穴住居跡群
(神奈川県藤沢市ナデッキ道路)



廣場空間に基群、外側に掘立柱建物跡・竪穴住居跡・貯蔵穴群
(岩手県紫波郡紫波町西田遺跡)



空の広場空間と外側に貯蔵穴・竪穴住居跡群
(千葉県市原市草刈貝塚)



空の広場空間と外側に大型掘立柱建物群
(新潟県南魚沼市五丁歩遺跡)

第5図 環状集落の内部構成の地域差

集落とは依然として大きな差がある。この両者を同じものとみることはできないし、累積すれば同等となる②大規模短期的な集落も、結果的には長期的に營まれていない点に大きな隔たりがある。拠点集落とこれまで呼ばれてきた集落の価値はまさにそこにあり、長期的に円の位置や大きさが維持されている、つまり継続性が高いことこそが、この集落を研究するうえでのもっとも重要な点であるといえる。

まとめ

本稿では小規模集落の環状化と集落の円の大きさの差、そして円の大きさと継続性による環状集落の分類を試みた。しかし、円の大きさ、累積期間が前述したような単純な分類で收まりきれるとは考えていない。特に円の大きさは地形の制約を受けることが多いため、集落ごとに大きさや形状は一定にはならない。それでも、これまで取り上げてきたように、円の大きさには確かに差があり、また、短期間であっても円の大きい集落が營まれている。今回の検討ではこの点を明らかにすることを目的とした。今後検討する事例を増やし、環状集落と小規模集落の関係性をより鮮明なものとしていきたい。また、環状集落は中期だけではなく、早期末から前期、後期に存在している。しかし、前期あるいは後期中葉以降においては、土器や祭祀具などをみても、中期とはその文化的様相は異なっている。今回の検討で示した結果が、そのまま当てはまるとは思えない。前期・後期の環状集落は、それぞれの時期において検討を重ねる必要があると考える。

最後に集落の環状化と中央広場について若干の考察を加えたい。これまで取り上げてきたように、中期においては住居跡群が環状化する集落が普遍的に存在するが、なぜ環状化するのかという問題は解決していないままである。環状集落の特徴は、住居が円を描くように配置されることと、

それにより中心に住居の無い広場空間ができることがある。この広場空間には墓域がつくられたり、広場を囲むように掘建柱建物や貯蔵穴が作られることがある。広場空間の利用については、集落の構成員の供食の場（和鳥・岡本：1958）や、地域の拠点としてのコミュニケーションの場（小林達：1986）、墓域を形成する場（鈴木：1986）などと考えられてきた。そして、そうした利用目的として中央の空間を意識し、集落を環状化させたという考えは根強い。確かに拠点的な環状集落においては、広場空間は住居を構築されないままである。しかし、前述したような大規模・小規模複合集落では、広場空間が長期にわたって継続しているわけではない。また、広場を含めた環状集落の構成は地域によって異なる（第5図）。このような点を考えると、住居が円を描くように配置されることに意図を感じる。今回の検討では、円の大きさは集落の構成人数の差にある可能性を論じた。こうした観点から考えると、構成人数によって左右される住居跡の円の配置が環状集落の構築された目的であるならば、集落の環状化は、構成人数の増加によるものではないだろうか。前期末に比べ、中期の集落は住居跡の数が爆発的に増加することが知られている。移動の頻度を差し引く必要はあるが、前期末に比べ人々の暮らしが活性化していることは明らかである。つまり、円の状態の配置は、人口の増加によって集落が大きくなる中で、効率的な集落構造が環状だったのではないか。そうした状況の中で、水はけがよく日当たりのよい台地の尾根に沿って集落をつくることによって集落は環状化したのではないだろうか。環状化の要因の一つとしてこうしたことを述べたが、それは中期を通して環状集落をつくる主的な要因であったとは考えていない。環状集落が普遍的に作られていく中で、中央の広場空間に目を向けて積極的に活用していった可能性は当然である。

小規模集落は環状集落の一時期の姿である。特

に、拠点集落となりえる円の大きな小規模集落を集成し、検討していくことにより、集落の存続期間の差が何に起因するものなのか、明らかにすることができる。ひいては、そうした短期間しか営

まれなかった集落にこそ、環状集落を紐解くカギがあると考える。今後は、小規模集落と環状集落の比較をその内部構造、あるいは、領域などの観点から、検討を行っていきたい。

引用・参考文献

- 石井 寛 1977 「縄文社会における集団移動と地域組織」『調査研究集録』第2冊 横浜市ふるさと歴史財團埋蔵文化財センター
- 石井 寛 2004 「6.まとめと考察」『高山遺跡』横浜市ふるさと歴史財團埋蔵文化財センター
- 石井 寛 2010 「縄文時代の遺跡群と地域集団—港北ニュータウン地域の遺跡群研究から—」『横浜市歴史博物館紀要』第14号 横浜市歴史博物館
- 黒尾和久 1988 「縄文中期の居住形態」『歴史評論』No.454 校倉書房
- 黒尾和久 1995 「縄文中期集落遺跡の基礎的検討（1）」『論集・宇津木台』第1集 宇津木台地区考古学研究会
- 黒尾和久・小林謙一・中山真治 1995 「多摩丘陵・武藏野台地を中心とした縄文時代中期の時期設定」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平』宇津木台地区考古学研究会
- 黒尾和久 2001 「集落研究における「時」の問題—住居の重複・廃絶と同時存在住居の把握方法に問題をさせて—」『縄文時代集落研究の現段階』縄文時代文化研究会
- 小林謙一 1995 「住居跡のライフサイクルと一時の集落景観の復元」『シンポジウム縄文中期集落研究の新地平』宇津木台地区考古学研究会
- 小林謙一 2008 「縄文社会研究の新視点—炭素14年代測定の利用—」六一書房
- 小林達雄 1973 「多摩ニュータウンの先住者—主として縄文時代のセトルメント・システムについて」『月刊文化財』第112号 第一法規出版
- 小林達雄 1980 「縄文時代の集落」『国史学』第110・111号 国史学会
- 小林達雄 1986 「原始集落」『岩波講座日本考古学』4（集落と祭祀） 岩波書店
- 鈴木保彦 1986 「中部・関東地域における縄文集落の変遷」『考古学雑誌』第71巻4号 日本考古学会
- 鈴木保彦 1988 「定形的集落の成立と葬域の確立」『長野県考古学会誌』第57号 長野県考古学会
- 鈴木保彦 2006 「縄文時代集落の研究」雄山閣
- 鈴木保彦 2009 「関東・東海地方の縄文集落と縄文社会」『集落の地域性と変遷』 雄山閣
- 谷口康浩 1998 「環状集落形成論—縄文時代中期集落の分析を中心として—」『古代文化』第50巻第4号 古代学会協会
- 谷口康浩 2005 「環状集落と縄文社会構造」学生社
- 土井義大 1988a 「セトルメント・パターン」の再検討『史館』第20号 史館同人
- 土井義大 1988b 「考古資料の性格と転換期の考古学」『歴史評論』No.45 校倉書房
- 中山真治 1995 「縄文中期土器の時期割分と集落景観」『シンポジウム 縄文中期集落の新地平』宇津木台地区考古学研究会
- 山田光洋 2005 「大高見遺跡 小高見遺跡」横浜市ふるさと歴史財團埋蔵文化財センター
- 山本孝司ほか 2008 「八王子市 多摩ニュータウン遺跡 一戸441・446遺跡」 東京都埋蔵文化財センター
- 松浦 誠 2013 「荒川流域における縄文時代中期の小規模集落についての検討」『川の博物館紀要』第13号 埼玉県立川の博物館
- 和島誠一・岡本 力 1958 「南振貝塚と原始集落」『横浜市史』第1巻 横浜市

図版出典（それぞれについて加筆・改変した）

- 第1図-1 早坂廣人 1999 「中沢遺跡」『勝瀬原遺跡群』埼玉県富士見市遺跡調査会
第1図-2、第3図-5、第4図-1 村上達哉 1999 「八王子遺跡」『大日向遺跡・八王子遺跡』飯能市遺跡調査会
第2-1 岡本 勇 1990 『山田大塚遺跡』横浜市埋蔵文化財センター
第2図-2 坂上克弘 2002 『上台の山遺跡』横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
第2図-4 戸田哲也ほか 1996 『郷田原遺跡』八王子市南部地区遺跡調査会
第3図-4、第4図-2 石井 寛 1999 『小丸遺跡』横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
第3図-3、第4図-3 小宮恒雄ほか 2003 『二ノ丸遺跡』横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
第5図 谷口康浩 2005 『環状集落と縄文社会構造』学生社

研究紀要 第30号

—設立35周年記念—

2016

平成28年3月14日 印刷

平成28年3月18日 発行

発行 公益財團法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-0108 熊谷市駒木台4丁目4番地1

<http://www.saimabun.or.jp>

電話 0493-39-3955

印刷 朝日印刷工業株式会社